

長野県高校同窓連総会に出席 18.7.7 (@アルカディア市ヶ谷)

上原昇(2組、関東同窓会会長)

現在、長野県には高校が何校あるかご存知でしょうか。

NET でみると、公立が 89 校、私立が 19 校、計 108 校あり、うち東信地区には県立が 18 校、私立が 5 校、計 23 校となっています。

次に長野県高等学校同窓会東京連合会(略して同窓連)という組織をご存知ですか。

長野県に母校をもつ高校の関東地区同窓会の集まりです。昭和 40 年(1965 年)に創立されていますので、半世紀の歴史を刻んでいます。

7 月 7 日(土)、11 時から開催された平成 30 年度定期総会に上田高校関東同窓会を代表して出席してきました。当日の参加は 47 校、236 名、うち東信地区からの参加は 16 校、59 名、上田高校は 7 名。

総会では、役員改選があり、会長には巢山英毅さん(松本県ヶ丘 OB)が、事務局長には上田高校関東同窓会の倉沢裕さん(69 期)が再選(任期 2 年)されました。

総会終了後の講演会は、宮坂静生さん(1932 生、俳人、松本深志高校 OB、信州大学名誉教授)による『芭蕉から兜太まで その生き方について』と題する話を聴きました。65 期でも俳句を趣味にしている人は大勢います。

以下は宮坂さんのレジメから、

1. 大峯あきらと金子兜太の死生観

俳人にして宗教哲学者フィヒテの世界的研究者としても著名な大峯あきら(1929~2018)と戦後俳人の代表格の金子兜太(1919~2018)は奇しくも今年の 1 月と 2 月に亡くなった。二人の生き方や死生観は対照的であった。

2. 芭蕉と一茶の死生観

松尾芭蕉(1644~1694)の亡くなる 15 日前の句《此秋は何で年よる雲に鳥》は俳句の中に自分の生き方を託した絶唱の句といえる。

小林一茶(1763~1827)は、最晩年の句《花の陰寝まじ未来が恐しき》を紹介。

講演会の後は、懇親宴会が 15 時過ぎまで続きました。

(2018 年 7 月 9 日記)

【写真 1： 同窓連総会の様子】



【写真 2： 講演する宮坂静生さん】



会場の受付では、宮坂先生の教え子と思われる皆さんが先生の著書を山積みして紹介・販売していました。

私も『季語の誕生』（2009年10月刊、岩波新書）を買ってしまいました。

以上